

い  
ず  
み  
さ  
の  
教  
育  
の  
育  
育

NOW

今  
な  
う

問合先  
学校教育課

より一層の校種間連携・接続の充実を

昨年12月21日(金)に、エブノ泉の森小ホールで「第10回 泉佐野市教育フォーラム」が開催されました。当日は約450人の参加となり、保護者や市民のみならず、教職員が共に学ぶ機会となりました。参加されたみなさん、本当にありがとうございました。

「伝える」「話し合い」「つながり」「認め合う」「仲間づくり」といったキーワードに代表されるように、各中学校区からは「コミュニティシヨン力」を高めるための具体的な手立てが、たくさん発表されました。また、校種が違つからこそ見える新たな「気づき」や、体験・学びが連続していることの再確認などについて、参加者と学びを共有しました。

い・学びあい・響きあい」を基に、各中学校区(市立のこども園・小学校・中学校)が課題に即した次のサブテーマを設け、2年間実践を重ねてきました。

平成29年3月に告示された小・中学校学習指導要領や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針におきましても、教職員同士が情報交換や交流などを行う「小・中連携」のような校種間の連携や、「幼・小接続」のようにカリキュラムをつなぐ校種間の接続が、子どもの発達や学びの連続性を保障するために大切であることが述べられています。

【新池中学校区】おもしろそう! やってみたい! わかった! つながり・まなびが深まるしかけ

本市では、今後も保護者や地域のみなさんのご理解とご協力をいただきながら、より一層の校種間連携・接続の充実に努めてまいります。

【第二中学校区】自分から思いや考えを伝え、認め合う授業・保育(つくり)

【口根野中学校区】安心して活動できる仲間づくり〜聴き上手・伝え上手になろう〜

【長南中学校区】伝えよう自分のきもち〜私たち教師にできること〜



学 校 園 紹 介



豊かな遊びや生活経験を通して…  
～さくらこども園～

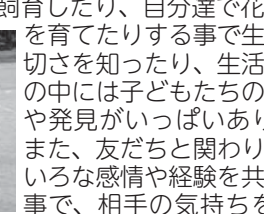
さくらこども園では、子どもたちが初めて経験する園生活が、楽しく実りあるものになるよう、0～5歳児それぞれの年齢で様々な遊びや経験を大切にしながら、友だちと一緒に「見て」「触れて」「感じて」「伝えて」、共に育ち合う仲間づくりをめざしています。

園庭には、シンボルツリーの山桜やイチヨウの木など、たくさんのお花や草花があり、春には桜が咲き誇り、夏にはセミ取り、秋には紅葉など、四季折々の自然に触れる事ができます。園庭で見つけた青虫を飼育したり、自分達で花や野菜を育てたりする事で生命の大切さを知ったり、生活や遊びの中には子どもたちの気付きや発見がいっぱいあります。また、友だちと関わり、いろいろな感情や経験を共有する事で、相手の気持ちを知り、自分の思いもしっかり伝えられるなど、人と対話する力も育っていきます。園生活では、遊びの中に学びがたくさん詰まっています。日々の遊びや生活経験を通して豊かな感性を育み、自分らしさを発揮しながら互いを認め合い、意欲的に活動できる子どもたちへと成長を願っています。



青虫から蝶になるようすを観察する子どもたち

すずびの水やり

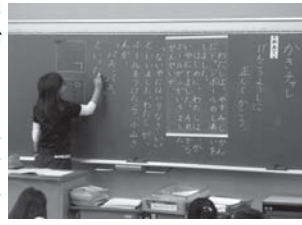


遊びの中から対話が生まれます

【子育て支援事業】  
就学前の子どもたちを対象に、子育て中の保護者のみなさんつながりがもてるよう、遊びの教室、園庭開放、育児教室、施設開放など、地域に根ざした子育て支援事業を行っています。行事開放もしていますので、ぜひご参加ください。

高めよう! 書く力  
～日根野小学校～

本校は今年度から、大阪府教育委員会より「確かな学びを育む学校づくり推進事業」の指定を受けています。今まで以上に、子どもたちに「確かな学び」を育むために、学校全体の授業力向上に取り組んでいます。



自分の考えや思いを文章に表すことが苦手な児童が多いことから、研究主題を「高めよう! 書く力」とし、自分の考えを豊かに表現できる力や目的に応じて説明できる力の育成をめざして、様々な取組を行っています。



その一つとして、書く力を高めるために「書きチャレ」の時間を全学年に設けています。この時間では、大阪府教育委員会から示されている「ことばのカプリント」を活用した授業を行っています。具体的には、「原稿用紙の使い方」「文章の構成について(はじめ・なか・おわり)」「グラフから読み取り、文章に表す」などについて学習しています。

授業では、以前よりも相手にわかりやすく、工夫して伝えようとする子どもたちの姿が見られ、書くことが苦手だった子どもも少しずつ文章で書くことができるようになってきました。



子どもたちのアンケート結果からも、「自分の考えを文章に表すことができて」と感じている児童が増えてきました。

今後も、子どもたちが自信を持って書くことができるような取組を進めていきたいと思ひます。